

科目区分 芸術文化課程専門教育科目(選択必修)  
科目名 音楽文化論 (前学期)  
タイトル 2年目を終えて

音楽科 岸 啓子

### 1. 授業概要

芸術文化課程音楽文化コース・造形芸術コース共通の選択必修科目である。授業の目的は時代や社会の中にあられる音楽文化の諸相を理解し、人・地域・社会・経済・技術等音楽を取り巻く要素との関連の中で、音楽の意味と役割を吟味することである。芸術のみを意識し学ぶ学生に、芸術・非芸術の音楽領域へ視野を広げ、一般の人々が音楽に何を求め、どのように交流しているかをながめ、そこにはどのような社会的・経済的な要素が働いているかを考えることである。

シラバスでは歴史上嘗てないほどの豊饒を誇る20世紀ポップス・ロックについて、音楽的特色と支持者層・社会的評価・経済的側面を関連させて時代的变化の特徴を把握することが、主な目標である。

本科目は音楽と造形芸術という中味がまったく異なる2つのコースに適合する芸術文化論構築の困難さゆえ、これまで非常勤講師が担当してきた。今年度が授業者にとって2年目であり、内容・方法・レベル設定・コミュニケーション等など多くの点で、教員自身が試行錯誤している段階である。自分の専門領域のみではこなせず、昨年は努力のわりに成果が見えにくかった。今年は、自分自身としては少し納得できたが、学生の反応は、依然芳しくなく、この授業の目的や意義が伝えきれていない結果となっているのは残念でならない。講義内容・方法両面に教員として最も不安を感じているこの授業について昨年に続きFD授業報告を行ないたい。

音文と造形の学生は専門意識が高く、自分の専門領域には意欲的に取り組むまじめな学生が多い。同時に授業評価を行なった音楽史は、音楽専攻生の学びの方向性に沿って専門性を高める授業内容であるため、ストレートに受け入れられており、音楽文化論より授業評価は高い。音楽文化論が成立する地平は、ある種の視点の転換と意識改革であり、ポップスを商業主義の産物とだけ見ることをせず、

音楽芸術にも、芸術至上主義を適用せず、芸術音楽も娯楽音楽も社会の産物であり、地域や時代に共有される文化であると見なす相対論であり、この観点を理解してもらうのに困難を感じている。

### 2. 授業改善のためのアンケート

アンケート項目は例年のとおり

- |            |             |
|------------|-------------|
| 1 意欲       | 2 出席状況      |
| 3 目的       | 4 内容的確さ     |
| 5 なし       | 6 説明のわかりやすさ |
| 7 発表等の機会   | 8 AV機器使用    |
| 9 レベル      | 10 有益性      |
| 11 受講の意義   | 12 教室の雰囲気   |
| 13 シラバス    | 14 受講最適学年   |
| 15・16 自由記述 |             |

以上の内容でアンケートをとった。11の設定は「この授業は今後美術や音楽を学ぶ上で有意義であると思うか」という問、13はこの授業を1年次に設置する方が望ましいかという問である。

### 3. 結果と考察

昨年来の課題であった授業の目的は、若干改善されたとはいえ、不十分である。音楽史のように目的が明確な授業の場合、5と4に集中するのだが、音楽文化論では目的をもっと明確にする工夫が求められる。今回目的が明確であった(5・4)とした学生は63%で、昨年の53%より改善されたとはいえ、誇れる数値ではなく、更なる努力が必要である。内容の変更が必要かどうかについては今結論を出さず、1年後に考えてみたい。

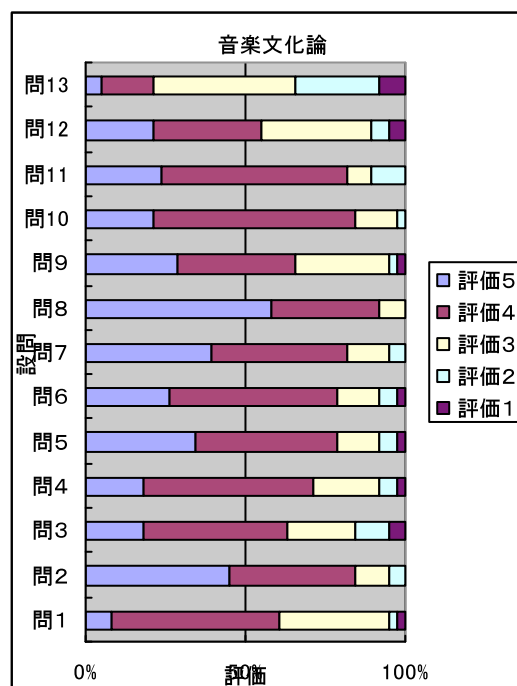
今回レベルについては概ね適切とされたが、1名適切でないと思う学生がいた。用語がわからず理解できなかったとのことである。音楽は楽譜を含めて多くの約束事が組織化された世界であり、用語を積み重ねて現実でない世界を構築している。美術の学生が受講することを考え、中学校程度の音楽理論の用語しか使用しておらず、これ以上レベルを下げ

ることは考えていない。音楽には中学生以下の実力の学生も受講に来るが、そのような学生には自分のレベルを絶対化するな、と来年は恫喝するつもりである。毎回のコメントに疑問を書いてくれれば答えられたのに、と思うと残念な気持ちである。しかし適切なレベルとは何処にあるのか。一般入試課目でない音楽は、受講生間の実力や理解力が大きく異なっている。昨年度の授業評価のまとめに、「次年度からは、毎回の授業主題を説明し、目的との関連や意義についてもっと明示して理解を得たいと思う。」と書き、少しはそうしたつもりであったが、効果はまだまだである。

授業の意義については役82%の学生が極めてある・ある程度ある、と評価しており、音楽を上記観点から捉える授業の試みは、結果的には受け入れられたとも思われる。昨年度の73%と比べ、割合も上がり、8割の学生が意義を認めてくれた事実は有難い。

毎回疑問を感じるのは、クラシック音楽の優位性を絶対的に信じ、ロックやポップスなどを低級視する学生がいることである。価値を問題とする場合問われるのは、ジャンルではなく、質であり、この点の理解を求めのだが、固定観念に切り込めない無力さを感じる。発表授業では、発表者は意欲的であったがコメントが「よかった」「感動した」「好きだ」等自分の好みを述べるのみで、より深く聴き、根拠を挙げて説明する姿勢が乏しいと感じられた。これは音楽の聴き方を授業の中で改めて確認する契機となった。自分自身の感性で聴くことは大切だが、安易に感動を求め、吟味する前に好きになり、嫌いになり、感覚・感情に振り回されるような聴き方をする学生が多いことが気がかりである。どのような音楽であれ、感情と感性と知性で聴く総合的聴取をこの授業では教えたいのだが、お題目で終わってしまっている。

自由記述を記す紙幅がなくなったが、ロックを社会的・文化的・音楽的な面から捉えることに興味を持ったと書いてくれた学生の言葉を励みとしたい。



### 音楽文化論 38名

	5	4	3	2	1
1意欲	3	20	13	1	1
2出席	17	15	4	2	0
3目的	7	17	8	4	2
4内容	7	20	8	2	1
6説明	10	20	5	2	1
7発表	15	16	5	2	0
8AV	22	13	3	0	0
9レベル	11	14	11	1	1
10成果	8	24	5	1	0
11意義	9	22	3	4	0
12環境	8	13	13	2	2

13	ある	ない
シラバス	22	16